

尾瀬国立公園記念国際シンポジウム

平成20年7月20日(日) 10:00~15:30

於：小出郷文化会館 小ホール

◎挨拶

群馬県知事 大澤
環境省自然環境局長 桜井
新潟県副知事 小熊

◎基調報告

環境省関東地方環境事務所総括自然保護企画官 関根達郎
「尾瀬国立公園の意義と課題」

◎パネルディスカッション

『尾瀬国立公園をめざすもの』
—地域や多様な関係者との協調・協働による国立公園管理の可能性と課題—

【コーディネーター】

横浜国立大学大学院教授・(財)尾瀬保護財団評議員 加藤峰夫

【パネリスト】

- ・アメリカ国立公園局 国際協力専門官
ルーディー・ダレッサンドロ
- ・スコットランドケアンゴーム国立公園管理局 遺産・土地管理代表
ハミッシュ・トレンチ
- ・インドネシアグヌンハリムンサラク国立公園所長
バンバン・スプリヤント
- ・ニュージーランド国立ワイカト大学教授
メイレイ・クリスティン・リム

司会：東京電力(株) 竹内純子



大澤群馬県知事 挨拶

昨年8月に29番目の国立公園として尾瀬国立公園が誕生しました。尾瀬の素晴らしい自然を今後どのように保全していったらよいのか。その基本となる考え方は“みんなの尾瀬をみんなで守りみんなを楽しむ”という尾瀬ビジョンの基本理念として育てられております。

この素晴らしさを広く国内外に発信するとともに、ここでの成果が日本と世界の自然保護に関係する政府自治体民間機関の関係者など多くの人に浸透し、将来に向けてのそれぞれの具体的な行動に反映されることを希望するものであります。

桜井環境省自然環境局長 挨拶

尾瀬国立公園が誕生して1年になろうとしています。尾瀬ヶ原尾瀬沼の地域に会津駒ヶ岳田代山帝釈山を新たに加えて21世紀最初の国立公園であります。

尾瀬国立公園の一番の特長というのは本州最大の高層湿原ということです。保護管理の面におきましてもゴミの持ち帰り運動ですとか、マイカー規制の導入、尾瀬保護財団という保護の仕組みなど全国に先駆けた取組みが展開されてきた自然保護行政・国立公園行政のパイオニア的存在であると考えております。今後更に新しい取組みを検討し導入して、尾瀬モデルというような運営の仕組みをレベルアップしていきたいと思っております。

小熊新潟県副知事 挨拶

尾瀬の素晴らしさは改めて強調するまでもありませんが、多くの方々が尾瀬を訪れその美しい自然に触れる事で、環境を守ることの大切さを考えるだけでなく地球規模の環境の大切さをも考える機会になる事を期待しております。

減少傾向であった尾瀬の利用者が昨年度は4%増加しており、特に新潟県側からの入山者数は平成18年の16,520人から平成19年の36,518人と倍増となりました。今年度6月、1ヶ月間の船による入山者数は前年に比べ4倍を超える増加となっております。

新潟県からのアクセスは唯一船を利用する環境に優しいルートであります。新潟県としましてもこの魅力をより多くみなさまにご理解いただき利用していただくことにより、利用口の分散化と尾瀬の環境への負荷軽減に繋げていけるかと考えております。この魚沼地方の豊かな自然と人々の暮らしの関係、これらを支える自然保護の思いや自然環境とともに生きる生き方が根付いております。この地域の魅力が尾瀬の持つ発信力と相まって、全国的な知名度にまで高められることを期待しております。

◎基調報告

環境省関東地方環境事務所総括自然保護企画官 関根達郎 「尾瀬国立公園の意義と課題」



日本の自然公園に関する制度のあらまし・尾瀬国立公園の課題・それに対する取組みについて報告をさせていただきます。

自然公園の仕組み

1957年自然公園法が制定され現在の自然公園制度が確立した。

3種類の自然公園

- ・国立公園…わが国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景 原則 30,000ha 以上
- ・国定公園…国立公園に準ずる優れた自然の風景視
- ・県立自然公園

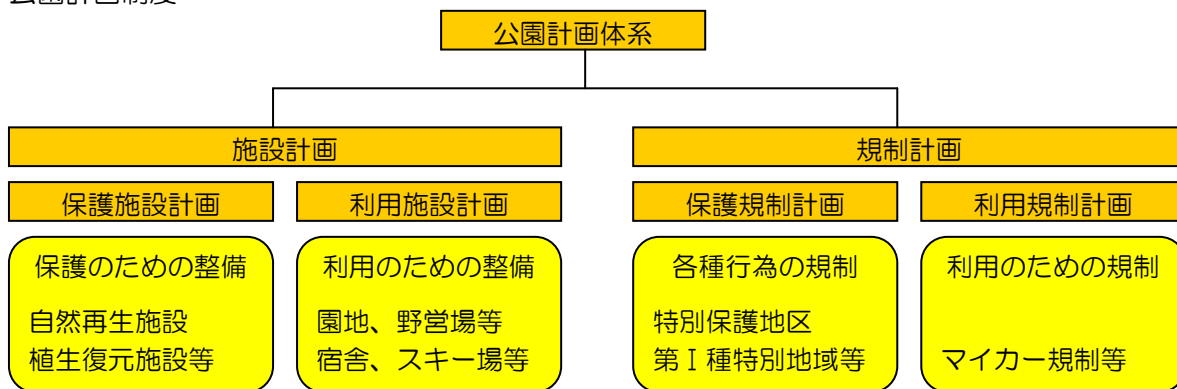
現在の自然公園の指定状況

国立公園…29箇所

国土面積に対する割合…5.52パーセント（3種類の自然公園全体合計 14.31%）

それぞれの自然公園毎に計画を定めることになっている。

公園計画制度



・施設計画

植生を復元するため保護するための施設
広場・キャンプ場・宿舎等の利用施設

・規制計画（各種の様々な開発行為を規制していく。）

特別地域…特別保護地区・第Ⅰ種から第Ⅲ種までの特別地域に分けて福祉性のあるところから比較的緩やかな規制をかけていく。
いろんな場面の規制…マイカー規制等

国立公園としての管理の特徴

・営造物ではない。

地域を定めて指定をして開発に対する規制を課することによって自然を守っていく。

・都市計画制度に似た制度である。

規制をかけて自然を保護していく。

国立公園の土地（全国）

国有地…61.9%

公有地…12.4%

民有地…25.6%

地域自然公園制度を採用しているわが国の国立公園に於いては、国だけでなく地域の様々な方々が関係し、そういう方々との協働によって公園を管理しているのが基本。

公園事業

- ・利用施設計画に基づいて登山道・宿舎・駐車場等の整備をしていく。
- ・国は責務として国立公園事業を指導していく。
- ・地方公共団体も環境大臣の同意を得て執行することが出来る。
- ・民間事業者も認可を得て執行することが出来る。（尾瀬の木道等）

尾瀬国立公園に関して

- 1934年 12月 4日…尾瀬を含む地域が日光国立公園として指定
- 1938年 5月 13日…特別地域の指定
- 1953年 12月 22日…特別保護地区の指定
- 1967年 12月 5日…公園計画の変更
- 1971年 11月 19日…自然公園審議会の答申「会津駒ヶ岳及び帝釈山地区を日光国立公園に編入することを適当と認める」

尾瀬を取り巻く様々な取り組み
 1949年に尾瀬保護規制同盟結成
 1960年から70年代…尾瀬の自然を守る会の結成・ゴミ持ち帰り運動・マイカー規制・植生復元事業等先進的な取り組みが次々と実施されていった。
 尾瀬サミット開催
 尾瀬保護財団設立

- 2005年 11月 8日…ラムサール条約湿地に登録
- 2006年 11月 30日…尾瀬ビジョンの策定
- 2007年 7月 25日…中央環境審議会答申
- 2007年 8月 30日…尾瀬国立公園の指定
- 面積 37, 200ha (従来の日光国立公園の時の1.5倍)
 日光国立公園からの編入 : 25, 203ha
 新たに国立公園区域に編入 : 11, 997ha

地種区分別

特別保護地区	特別地域				普通地域	合計
	第1種	第2種	第3種	小計		
9, 386 25. 2%	6, 208 16. 7%	15, 923 42. 8%	5, 683 15. 3%	37, 200 100%	0 0%	37, 200 100%

土地所有別

国有地	公有地	民有地	合計
20, 312 54. 6%	184 0. 5%	16, 701 44. 9%	37, 200 100%

特別保護地区面積 25. 2% (全国の国立公園 53. 2%) *割合が高い
 普通地域なし (全国平均 28%) *特徴的
 民有地 44. 9% (全国平均 25. 6%) *割合が高い

尾瀬国立公園の指定による効果

自然環境保全上の効果

- ・区域拡張と適切な保護規制によりこれまで保護されていなかったところが連続性をもって保護される。
- ・自然保護のシンボルに相応しい国立公園ということで、尾瀬の更なる位置付けの高まり。ふれあい体験の場としての質の向上
- ・一元的管理による効率向上によって質の高いふれあい体験の場を提供出来る。

地域振興・活性化

- ・尾瀬がブランドとして強化される。
- ・地域経済・住民認識の高まり。

尾瀬ビジョンの策定 (2006年 11月 30日)

尾瀬に関係する学識経験者・地元関係者・自然保護関係者・行政機関の様々な方から委員と

して加わっていただき、基本理念として「みんなの尾瀬をみんなで守りみんなで楽しむ」ということを掲げ、科学的見識に基づいて保護を超えないのを原則としている。地域の人々と共に保護し、尾瀬保護の精神を広く国民に普及をし、環境保全に対する意識を啓発していく。基本に沿った諸対策（主なもの）

<p>○保護について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生態系の状況の的確な把握（調査研究、モニタリング） ・野生動物対策（ニホンシカ、ツキノワグマ） ・環境保全（過去のごみ対策、植生復元、至仏山保全対策、外来植物対策）
<p>○利用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適正利用の推進（利用分散、情報提供、アプローチの検討） ・施設整備（ビジターセンターのあり方検討、サイン計画、入山口の整備） ・環境教育とエコツーリズム（子供たちの受入れ、ガイド資格認定制度の創設）
<p>○管理運営体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係者間の役割分担と総合調整（地域との協働体制、調整の場の設定） ・安全対策（傷病・遭難対策の体制整備、危険箇所の補修・点検） ・企業・団体や国民からのサポート体制（サポートを受ける仕組みづくり） ・尾瀬保護財団の充実（人材育成、友の会の充実強化）

以上が今後の尾瀬国立公園として取り組んでいく課題であろうと考えております。

尾瀬ビジョン策定とほぼ同時期に、国立・国定公園の指定及び管理運営に関する検討会を設置し、2007年3月に提言がなされています。

高齢化・過疎化といったようなことで国立公園を有する社会の弱体化も見られます。

国立・国定公園の存在感が低下して求心力が無くなってきているのではないかと、そういった問題意識を背景としてこの提言を取りまとめたものです。

国立・国定公園の指定及び管理運営に関する提言

一地域制国立公園の管理運営のあり方一

地域自然公園は、多くの関係者の協力によって充実した管理運営を行うもの。特に地域との連携は重要であり、国立公園地域にとって重要な存在となるよう、地域振興にも配慮した適切な利用を推進。

- ・公園の提供するサービスの明確化
- ・多様な主体の参画による計画策定と管理運営
- ・科学的データ整備、評価システム及び順応的な管理運営
- ・利用の推進と地域振興
- ・周辺地域との連携
- ・国民・住民に対する説明責任
- ・環境省の体制整備

尾瀬についてモデル的にやっっていこうということで、2008年1月に尾瀬国立公園協議会を設置いたしました。全体をカバーする組織は無かったということで、課題を取り扱う協議的組織として位置付けをしています。

具体的役割は

尾瀬ビジョンの進行管理

既存の協議組織・関係機関による取組みへの助言・支援

取組みが行われていない課題への対応の検討

当面の検討項目は尾瀬ビジョンに掲げられた項目の中で3つをとりあげています。

生態系の状況の的確な把握

適正利用の推進

企業・団体や国民からのサポート体制

以上

◎パネルディスカッション

『尾瀬国立公園のめざすもの』

—地域や多様な関係者との協調・協働による国立公園管理の可能性と課題—



関根)

「エコツーリズム」というのはどういうものなのか？またどのような利点があり、どのような問題点があると皆が気づき始めているか？

ニュージーランド)

ニュージーランドとオーストラリアにおきましては、これは自然に根付くものであり生態系としても維持可能なものであり、そして自然保護また地域社会に寄与しているものであるということ。この「エコツーリズム」は自然環境の教育或いは通訳を含むものだといわれております。その中には国立公園の保護、解釈といったものが入ってくるわけです。国立公園管理については2つのカテゴリーがあり、自然管理と来園者の管理です。オーストラリアとニュージーランドでは「エコツーリズム」の価値は同じものです。

自然管理について

法律・法案により、その土地固有の植物や動物、或いは歴史的・文化的な遺産を保護しなければならないという特別な重きが置かれているということです。

つまり、人々というのはその土地固有の動物や植物に対して危害を与えることは許されていないわけです。

来園者管理について

来園者は様々な技術を持っていたりスキルを持っていたり、興味の湧くところが違うわけです。国立公園を一番上手く楽しんで使っていただくということが目的としてあります。

ニュージーランドの3分の1が国立公園と指定され、保護区域として設けられています。環境保護庁（DOC）の監督下にあります。「エコツーリズム」の政策を策定する場合は環境保護庁（DOC）によって行われています。1987年設立されたところです。各々の国立公園には管理計画が必要となってきます。DOCの政策ガイドラインに基づいて作られなければならない。管理計画は国立公園がある土地の価値に基づいて策定されるわけです。

環境保護の通訳に関しますトレーニングが必須事項となっています。特に「エコツーリズム」

を運営する者にとっては必須要件で、DOCから求められているものです。必要とあれば環境保護庁は個人・組織・団体等と話し合いをして法的に適った現実的なアクセスを公立公園に出来るようにともしております。

直近ではハリウッドスターがニュージーランド南部に土地を購入しました。条件としては、このスターがドックランドに我々をアクセスさせなければならないということでした。この条件を呑んでくれないとこの土地を所有することが出来ないと申し上げました。

ニュージーランドでは非常に高度な地域社会に根付いたビジター情報システムといったものの開発が成されています。「アイサイト ビジター インフォメーション」iサイトと表示されており、重要なサインで特に海外からの観光客にとって役立つものです。殆どの地域や町や市そして国立公園にはiサイトが設けられております。

オーストラリアの「エコツーリズム」の立案、開発はインフラや運営、マーケティングの観点から見ますと維持可能な3本柱といったところに重きを置いています。

3本柱というのは経済的に持続可能か、環境的に持続可能か、社会的・文化的にも維持可能性が高いものなのか否かということになってきます。「エコツーリズム」と国立公園は連合政府と州政府また地域・自治体等によって管理されています。国立公園の局長は国の傘下に入りますが、21の戦争の歴史のある遺跡などの管理をしています。自治体・州政府の方にもう少し管理権限を譲与して、国立公園を管理していただくというようなこともしてもらっています。従来オーナー（先住民等の地域社会）と共に関係とパートナーシップを構築することによって国立公園の共同運営等もしています。

殆どの公園は州が管理しているため各州には公園制度のマスタープランがあります。許可される活動の種類、訪問者のグループのサイズ、利用可能な又は使っても良いインフラのタイプ、許可される商業活動の質、情報提供のスタイル、一般のコミュニティー・訪問者への情報提供のスタイル等がマスタープランで決定されています。

ニュージーランドにはもっと統合された一貫性のある資源の管理局があります。国立公園の「エコツーリズム」についてはDOCが一貫性のある管理をしています。オーストラリアよりもより良い方法で管理が行われています。

国立公園一般については、ニュージーランドでもオーストラリアでも非常に多くの異なる活動が行われています。こういった活動は自然を基礎としたものであり、レクリエーション活動です。これには自然の景観が必要とされています。

もうひとつ重要な点があります。ニュージーランドでもオーストラリアでも「認定制度」と呼ばれているものです。認定制度の1番目の目的はライセンスシステムつまり観光ビジネスの許可を与える際の質の保証をすること。特に国立公園で環境を促進したい場合、この品質の保証が非常に重要となります。訪問者に対して質の良いもの、質を確保した観光業者が必要となるからです。もうひとつは最適な環境（ベストプラクティス）が国立公園内で活動する観光業者によって実施させるよう確保することが出来ることです。更に重要なのは、この認定制度は間接的に国立公園のブランドの形成となっているからです。

ニュージーランドの例。コルマークという品質評価制度で、観光業の正式な品質の品質保証マークです。ニュージーランドにいらっしゃる時はインターネットを見て、この品質保証のマークがあるかどうかを御覧ください。例えば宿泊するホテルの星が5つなら非常に良いサービスが受けられるということです。

オーストラリアではニュージーランドとは違い一連の認証制度が複数実施されています。品質、観光標準やグリーングローブプログラム、自然「エコツーリズム」の基で認定制度が行われています。そして分断されています。オーストラリアはニュージーランドと同じよう統一した国の制度にまとめて行きたいと考えています。

関根)

尾瀬でも十分考えていかなければならないことだと思います。良い「エコツーリズム」のためには「エコツーリズム」の場所を確保すること、行われる活動に品質クオリティーが確保されること。尾瀬では尾瀬保護財団がいろいろ活動していますが、その方向は間違えたものではないとしても上手くいくかどうか、上手くいったとしてもどういうことになるのか、そういった意味ではニュージーランドを参考にしていかなければならないと思います。

鹿（野生生物）の管理について、日本を代表する大型野生生物の鹿が近年増えすぎて、田畑を荒らすだけでなく国立公園の中の動植物にも悪影響を与える。少し前までは日光国立公園が困っていた。今はその鹿が尾瀬の方にも来ている状況があります。鹿が食べてしまう貴重な高山植物を守るためにはどのような活動をすべきなのか？

スコットランド)

スコットランドでは主に民間の人が鹿の管理をしています。狩猟の文化があるからです。一日当たり鹿を撃つことで1万5千円から10万円ほど収入を得る事が出来るのです。政府は特別に鹿が多いところでは特に規制を課して自然の保存をしています。ターゲットの目標値を定めて鹿の数を目標値にするようにします。そのためには金銭的な支援も出しています。土地の所有者が鹿の数をコントロール出来なかった場合は政府が直接的に数を減らします。重要な地域ではかなり減らすことが出来ました。

関根)

鹿を撃っても良いということになると、鹿のハンテングをしたいという人が沢山居るような雰囲気を受けましたが、その通りでしょうか？

スコットランド)

はい。かなり沢山の人が狩猟が好きです。更に外国からも沢山の人が来て鹿の狩猟をしています。これが私達の経済の一部となっていて非常に大きな収益源となっています。大学でも鹿の狩猟のコースがあります。

関根)

狩猟で山に入る人自体が絶滅しつつある日本とは、だいぶ状況が違うということはあるでしょうが、やはり積極的なコントロールをやっていかないと自然地域が守れないというメッセージかと思います。

地球温暖化と自然保護という問題について、今世紀の終わりにはもしも私達がこのまま何もしないのであれば、地球の温度が3度から6度も上がってしまうかも知れないという情報が、かなり確実性を増してきました。

もしもそんなスピードで温度が上がり地球上の気候が変わっていくということになれば、いくら努力をして日本の尾瀬・アメリカの国立公園・スコットランドやインドネシアの自然地域を守っていたとしても、その努力はすぐに無駄になってしまうかも知れません。平均気温が2度も上がれば尾瀬の湿原は多分アツという間にただの草原になってしまうでしょう。温暖化の問題に対してそれぞれの自然地域はどんなことが出来るのか、更に国立公園を管理する環境省・国立公園局は一体どんな事が出来るのだろうか？

アメリカ)

例えば海面が上がっています。それによって沿岸部の都市が飲み込まれてしまう危険があります。アメリカでは国立公園は都市部や内陸部にあり気候変動の影響を受けます。そこでモニタリングなシステムを導入しました。ベースラインをまず設定しモニタリングを行うことにしました。更にプライベートフレンドリープログラムというものをもっています。これによって炭素の排出量を減らそうとしています。例えば電気自動車を使うことによって国立公園から排出される炭素量を減らそうとするものです。もうひとつ減らそうとしているのは照明です。白熱灯などの使用を減らそうとしています。このような取組みを行っています。

関根)

日本でも環境省は非常に積極的に温暖化対策を行っていることは皆様もご存知の通りです。国立公園という観点から見たら温暖化についてはどんなことをやっているのだろう、特にこれからの国立公園をリードしていく新しい形の国立公園として期待されている尾瀬では、温暖化と尾瀬の関係についてどんなふうに考え、何をしたいこうとしているのか？

尾瀬レンジャー 藤田)

尾瀬の国立公園管理ということでは、マイカー規制です。元々尾瀬に入る排気ガスを減らそうといった意味もありますが、地球温暖化の防止に貢献していると思います。特別に温暖化対策としてやっているわけではありません。温暖化の可能性として、鹿が今どんどん増えていて尾瀬にも入って来て尾瀬の植生が荒らされているということです。ハイカーの方が尾瀬に来て湿原が荒らされているのを見て、これは温暖化も一因かも知れないなと感じて、私も温暖化防止に参加しようと思うことに尾瀬が役立っているという意味で、ハイカーの人に尾瀬に来てもらって尾瀬をモデルにした温暖化防止に貢献出来ていると考えます。

関根)

確かに尾瀬だけで頑張っても地球温暖化を防止出来るわけではない。でも地球温暖化が起これば尾瀬のような自然がどうなってしまうんだろうというメッセージを多くの人に伝えることで少しでも多くの人に関心を持っていただけるならば、これは国立公園が出来ること、まず最初にやるべきことだと思います。

海外の国立公園管理の状況についてお伺いしたいと思います。いくつかの国では公園に入る時にお金を払わなければいけない。入園料があることを知って驚いたり、素晴らしいと思われた方もおられると思います。ニュージーランドは結構入園料を取ることで有名です。インドネシアも入園料制度を持っております。アメリカは入園料制度が始まった国でもあります。スコットランドでは入園料制度はまだ始まっておりません。

入園料を取るのには良いことなのか悪いことなのか？取るというのはどういう意味で効果があるのだろうか？どういう問題点があるのだろうか？

アメリカ)

私達は議会から毎年22億から25億\$の予算を得て国立公園を運営しています。十分だと考えられていますが、私達はそうは思っていません。沢山のプログラムがあるからです。殆どの国立公園が入山料を取っています。その殆どがビジターのためのサービスを提供するために使われています。ビジターセンターを新しくしたり、トイレを綺麗にしたりするためです。20%は公園の下(もと)には入って来ません。中央のファンドに入ります。ここからもう少し規模の小さい公園の財源に充てられます。こういった公園が施設を新しくするために必要としているからです。殆ど全てのプログラムは人々には非常に人気があります。公園の差異によって入山料は価格が変わってきます。公園の中では入山料がどのように使われているかを説明しています。ある議員がこんな話をしてくることがあります。どれだけ入山料を取れば良いのか、そもそも取るべきなのかを議会が知りたがっていることを言ってきました。しかし私達は入山料を続けたいと思っています。と言うのは国立公園にとってはかなりの規模の財源を確保することになるからです。

インドネシア)

何故政府が決定したかと言うと、教育のため、自然保護のため、研究のため、「エコツーリズム」のためです。「エコツーリズム」は国民が楽しむためということです。私達の政策というのは入山料だけを取ってそれを出来る限り低い水準にする。例えば一度に月100円だけにするというものです。外国人に関してはもう少しこの価格を上げ500円くらいにします。これは非常に重要です。と言うのも森林は国そして国民のもので、ですから国が義務として国民にその森林を提供することが重要です。しかし予算に制限があります。ですからこういった入山料を取るが必要になってきます。

関根)

日本ではこういう議論がなされます。もし入園料を取ってしまうと公園に入ってきたお客さんが、管理のためのお金を払ってしまっているのだから何処にゴミを捨てても良いじゃないかと。自然をちょっとくらい壊しても良いじゃないか、だってお金はもう払ったのだから。こんなふうに考えられたら困るなと思うこともあって、日本ではなかなか入園料制度が始まっていないということもあります。

アメリカでは入園料を払ったのだからと、利用者が環境のことを考えなくなってしまうということはありませんでしょうか？

アメリカ)

私達アメリカ人はお金を払う時自然保護のことは考えていないと思います。楽しむことを考えていると思います。ですからレクリエーションといったことに私達は自分達のプログラムの焦点を当てているわけです。他方で自然保護とのバランスも取らなくてはなりません。個人的には、環境保護に関する教育が非常に少なくまだ十分ではないと思います。教師・パークレンジャーなどの個人的なイニシアチブというのも一部では存在しています。例えば子供について教育を始めるといふものです。そしてレンジャーの一部は自然保護・資源保護に関して1対1で教えたり、ポトキャストを通じたり、何故この場所を保護しなければならないのかという解説を通じて良い教育を行っています。

関根)

日本ではまだ始まっていない制度で、「エコツーリズム」のガイドをどうやって育てるか？特にガイドの認定制度、ライセンス制度についてです。ニュージーランドではライセンス制度があり、当然のことだと受け入れられているということでした。併せてライセンスを与える資格の基準クオリティーの基準はどれくらい厳しいものなのか？ライセンスを貰えない人達・業界から何か強い反対は無いのか？

ニュージーランド)

ガイド向けの教育とトレーニングは主にDOCが行っています。「エコツーリズム」のオペレーターもガイドのトレーニングに責任を持っています。DOCが政策を設定し、全てのツーリズムの観光オペレーターはコマと呼ばれる国の機関からのライセンスが欲しければ、申請提出を行わなくてはなりません。もし申請が受け入れられない場合はライセンスを受けられないということになります。その場合はその観光オペレーターは仕事がもう立ち行かなくなって破損してしまうことになり兼ねないわけです。全てのオペレーターがライセンスを持っていることはアドバンテージであるということを知っています。ベストプラクティスを実施することも自分達にとってアドバンテージになると知っています。これは強制ではありませんがライセンスを持っていることが事業の成功の是非を占う訳です。コミュニティもトレーニングを提供しています。専門家や経験を積んだボランティアによるものです。特に長い間その地域に住んでいる人達であれば、地元に関しての社会・コミュニティ・地域全体についての知識を持っています。こういった人達がボランティアとして重要なトレーニングをガイド向けに提供しているのです。これは「エコツーリズム」のビジネスに関してです。

全てのガイドの教育・トレーニングは大学によって支援されています。研究は大学によって行われ、このような教育をサポートしています。従ってガイドの教育は科学に基づいたものです。DOCは「エコツーリズム」のオペレーターと一緒にマーケットリサーチをよく行います。そしてビジターの満足調査を行っています。情報を収集し常にそれを新しくし、ガイドの教育に提供しています。これによって価値あるトレーニングを提供し、利用者に対しても情報を提供することが出来ています。

関根)

今尾瀬保護財団は非常に積極的に良質のガイドを育て、尾瀬での自然解説はその質の高いガイドによって行われるということを目指して活動をしておられるということですが、今の状況、いつごろから目に見えて変わってきそうなのか？そこにいくまでにどんな難しい問題があった、どんなアドバイスや協力が必要だと感じておられるのか？

尾瀬保護財団 笛田)

いくつかある団体を集めて尾瀬ガイドネットワークという組織を作って、そこでガイド研修や情報交換等をやってきました。その中でガイドの認定制度を作った方が良いのではないかと、ということが前々からありまして、昨年度研究会を立ち上げどんなものなら出来るかと制度研究

を行って参りました。結果として、今年5月に尾瀬ガイド認定協議会を立ち上げました。その組織にはガイドネットワークに加わっていた団体が入り、その団体によって運営をしていくことになりました。現在は認定に向けてテキスト作成を始め、テキストが出来上がった段階でガイド認定をやっていこうということになっています。多分今年度中くらいに講習会、来年度のシーズンに入って実務研修をやってガイド認定をやっていこうということになっています。

当面の間は、本来であれば認定試験をして試験に通った者をガイドとして認定していこうということになっていますが、取り敢えずはガイド業をやっていらっしゃる方に講習をやってガイド認定をしていきます。認定についてはいろいろ意見もありましたが、最終的には協議会に於いて認定をやっていこうということになっています。国や地域の公共団体や政府等が認定を行うという制度もあるのですが、それについては法律等いろいろ問題もあるでしょうから、取り敢えずは協議会によって認定制度を行っていこうということになっております。

関根)

認定されたガイドでなければ尾瀬では活動が出来ないという非常に厳しい制度になるのか、厳しくはないけれどもお客さんが認定されたガイドしか選ばないという形で実際に上手く動いていくのか、これから興味のあるところですが、尾瀬にとって一番ふさわしいのはどういうものかお考え戴きサポートしていただきたいと思います。

インドネシアの国立公園の場合、土地は国が押さえ国が管理しているということですが、その国が管理する公園の中に元々住んでいる人達が居て日常の生活をしている。その人達の日常生活というのはどんなようなことをやっておられるのか？農業なのか林業なのか尾瀬と同じように他の場所とあまり変わらないような生活なのか？

インドネシア)

2つの種類が考えられます。ローカルコミュニティといったところを公園で考えてみますと、まずアクティブなコミュニティ即ち先住民です。先住民と普通のコミュニティの方々ですが、こういった方々2つの団体を尊重していかなければならないわけです。

先住民の方々はその土地に固有の知識があり文化があります。収容量というのかなり限られてきます。いつ狩猟を行ったら良いのか、どれくらい狩猟が出来るのかということを知っているわけなのです。その場合我々は特別な制限区域を設けて、このコミュニティに対して与えていきます。

2番目のローカルコミュニティ、国立公園が制定される前から住んでおられる方々とは、覚書きを作り一緒に協議をし、既成を設けていくということになります。例えば、その公園では森林などをして良いし原生林を植えても良いけれども、果物の採取等をして良いというふうに言うことなのです。それをする事によって先住民の方々の収益源に繋がるわけです。同時にこれは自治体がサポートしているものなのだと意識していただきます。環境サービスに対するクレジットを与えていくことになるわけです。例えば農業に属している方々に対して与えていくわけです。長期的に十分な収益源があるとすればその森林から出て行くということも可能なのです。これは2番目の管理方法になるかと思えます。このゾーニングなのですが、こういった方々に対しては特別な使い方をして良いというような許可を与えています。

先住民の方々是非常に強いリーダーシップを地域社会で作っていて、地域のルールが設定されています。持続維持可能な決まりといったものがあるわけです。そういった方々に対してその地域の管理を自分達でもしてもらえけれども、我々の方でも管理させていただきます。しっかりと環境保護をしているかどうかというようなことを私達の方でさせていただくことです。インドネシアでは2つのタイプの地域社会の尊重が必要となっています。

関根)

日本では国立公園ができる前からそこに住んでいる人は皆ネイティブピープルなんですね。そこがある日突然公園になってしまった。これは政府の横暴ではないか？と言うと政府の方は、皆さんはこのことについてプロフェッショナルだからこの管理を一生懸命やってくださいというのがインドネシアのやり方で、確かに土地を全部国が管理していてその中で以前から住んでいる人達と上手くやっていこうとすると、政府がいろんな形の補助・援助を含めた積

極的な活動をしていかなければいけない。

スコットランドでは同じように国立公園の中に沢山の人が住んでおられる。国立公園にしようという話が出た時には、地域の人達から公園になるといろいろと開発規制がかかってくるのではないかと自分達の地域の経済にマイナスの状況が出るのではないかとという心配があって大変だった。しかし公園になってしばらくすると、公園になるって悪いことではないかと皆さんが思うようになってきたということですが、国立公園作りではどんなふうに上手く地域の人達に納得いく努力をされたのか？納得いただきながら国立公園としてある環境を保全するという政府の最初の考え方をきちんと達成するということが出来たのか？

スコットランド)

新しい国立公園を設立するというのは、その地域に住んでいる方々の反対も得るわけです。前から住んでいた先住民の方々がその素晴らしい地域を守っていたということになります。将来的なことを考えると、そういった素晴らしい地域を国立公園にふさわしい形で管理していかなければならないわけです。人々に国立公園の保護を尊重していただくということですが、ケアンゴームでは80%の経済活動が観光に基づいているものです。それによって生活が成り立つというメリットがあるのだということ、コミュニティのイベントや資源を提供することによって理解していただきます。公園の中に住んでいるからそういったことが出来るわけなんです。我々は制限に重きを置いているわけではないのです。人々にその地域での動機付けをはっきりしていただきます。住んでいる方々がその特別な地域に何か寄与出来るということを理解していただきます。プラス開発プランがあります。新しい住居を建てて良い所、ビジネスを開発して良い所、自然保護の観点でキープしていくというような所を設けていきます。それは公園にどのような影響があるかどうかで決めていきます。

関根)

尾瀬を初めとして日本の国立公園でも、国や地域の公園関係の方々がその地域を公園にするために地域の人達と盛んな協議・話し合いを重ねています。日本ではもう75、6年もやって来ているわけで、それなりの成功は得ているかも知れませんが、公園になったらこんなに地域にとって良くなるという話で議論を進めたということあまり無かった気がします。そういう観点も必要と改めて考えます。

一方、その地域には人が住んでいないというのを原則とするアメリカの国立公園で、どんなNGOとどんなふうに協力しているのか？特に日本でも良く知られているような自然保護団体オーディボンソサィティや自然保護財団ネイチャーコンサーバーシンとどんなふうに協力しているのか？

アメリカ)

ジョン・ミラーはヨセミテ国立公園に関する団体です。その他にも国内のNGOと協力しています。一般的にアメリカのNGOは非常に強くパワーを持っていて影響力も強いのです。議員とも話し資金力もあります。自分たちの公園にとって利益のある活動のために資金集めをすることも出来ます。ただ私達がビジターの経験等に関してアンケートを行っていますが、そういったことを嫌がっています。また私達はいつも友人としてNGOと協力していますが、私達の環境収容力についてのアンケート等あまりNGOには人気がありません。アンケートにあまり良い感じを持っていないので、時には味方になったり時には敵になったりしています。それぞれの国立公園には喜友の会があります。特にグランドキャニオン国立公園ヨセミテ基金といったところのNGOは、資金集めやプログラムを作ったりその他の方向で私達をサポートしています。公園のシステムやサポートにとって、非常に沢山のNGOと協力すると多くの利点があります。私達のパートナーシップのオフィスにも沢山人が来ましてパートナーシップの申し出が多くあります。殆どのパートナーシップはローカルで、地元で管理が行われています。

関根)

各国立公園にある友の会は誰が作るのでしょうか？自然に出来てくるのか、公園局やそれぞれの公園がその団体を作るのに協力するのか？

アメリカ)

一般的には友の会の設立を促したりはしていません。ミシガン州の北にある小さな公園の管理長がいましたが、そこには友の会が無かったので公園の管理者として公園に何が必要なのかを考えました。地元の人達とも関係を強化しなくてはいけないと思いました。友の会の会員が居ないことに気が付き自分達で友の会を作ったという例があります。それが非常に大きな恩恵がありました。ローカルコミュニティではなく友の会を作ることが出来たということが私達にとって利点があったと話しています。通常NGOの方へ友の会を作ろうという働きかけは私達自体ではしませんが、そういった良い例もあります。

関根)

海外から来られた方が尾瀬でどんな経験をされたか？どんなことを面白い、どんなことはまだまだだと思われたか？

その前に、私が海外の方から質問されて答えられなかったこと。どうして地域の皆さんがこんなに一生懸命やっているのか？誰が尾瀬全体のリーダーシップをとっているのか？どうして東京電力や尾瀬林業という利益追求の筈の民間企業がこんなお金にもならないことをやっているのか？

そこで東京電力(株)さんにお聞きします。何故、どのような気持ちで尾瀬の管理をやってきておられるのか？これからどういうふうに尾瀬に関わっていこうと考えておられるのか？

東京電力(株) 竹内)

東京電力(株)が尾瀬の保護活動に取り組む明確な根拠というのはありません。株式会社というのが基本的にどういう存在かと言えば、事業を行って利益を得て、それを株主・関係者・社員に配分して生きて行くというのが大前提の存在であるわけで、お金を使うだけであって1銭の収入にもならず、自分の土地でありながら開発規制で思うように使うことは一切出来ない。こういった土地を持ち続け、更に保護活動に費用を拠出し続けるということにつきましては、明確にご説明出来る理由はありません。法的な根拠であったり、経済的な根拠という目に見える明確な答えが存在しないということです。企業にとって費用的な収入と同じくらい大切なのは、皆さんから信頼していただくこと評価していただくこと、そういった目に見えない評価という外貨を得られるのであれば、企業としてはこういう活動は持続可能になっていく。皆さんが良くやっていると褒めてくださることが、私共の活動をサステナブルにしてくださっていると思っています。

関根)

パネラーの皆さんからご質問をどうぞ。

インドネシア)

尾瀬国立公園はグヌンハリムン国立公園と共通点が沢山あります。インドネシアの電気の事業者が公園を支持しているからです。保全と水・電気・発電と密接な関係があると思います。水を使うことが出来れば、森林を使うことが出来れば、水も利用できます。こういうことが密接に関連しています。水は発電に有用で、特にダムを考えると水が発電に使えます。インドネシアの2つの民間会社・地元政府とNGOが私達をサポートしてくれています。フォーラムを作ってお互いにコミュニケーションを取れるようになりました。特に公園の管理プランについて意見を共に交わす場ができたのです。将来的にこのフォーラムを公園が永遠にサポートされるような基金の体系にしたいと考えています。

アメリカ)

コメントですが、アメリカにも電力会社がいくつもありまして、国立公園と非常に密接な関係があります。国立公園と電力会社の間でパートナーシップがかなりあると言えます。山というのは飲料水の水源でもあります。飲料水の水源がどこから来るのか知らない方が沢山います。山は飲料水にとっては重要で伐採する等は非常に大きな問題となります。山の伐採で川に影響

し飲料水に影響が出ました。電力会社がきちんとした飲料水の提供をしたいと考える時は、協力し合ひまして、より良い飲料水の提供が出来ると思うのです。尾瀬でもそういうことが考えられると思います。

関根)

電力会社の関わりというのは、その電力会社の経済活動と何らかの繋がりがある。ところが現在の東京電力(株)は少なくとも尾瀬周辺で大きく発電している訳ではない。飲み水確保ということで協力している訳でもない。そういう意味では純粋なCSR・企業の社会的責任なのかも知れませんが、そういう活動は東京電力(株)の組織の中で、株主の皆さんの間では理解されているのでしょうか？

東京電力(株) 竹内)

株主の皆さんに会社の方針をご理解いただくというのは最も重要なことになって参ります。電力会社は昔から自然の恵みを利用して電気を作ることをして来た業態ですので、自然との付き合い・コミュニケーションは非常に深いと思います。常に自然を荒らさず電気を作ることを考えて来ました。その原点が尾瀬にあったと会社としても考えておまして、国民的な財産としての尾瀬をお預かりしているという意味で、我々にとっても宝物ですが、我々の自然保護なり環境への姿勢がスタートした原点の存在としての尾瀬といった意味でも、非常に大事に思っています。会社の方針をご理解いただくためにもっとやっている活動をPRしていく、そしてもっと応援していただくなり何なりの判断を皆さんにいただかなくてはいけないと思っています。

日本に於いて足りないと思っているのは、誉めるといふ文化かなと思います。子供と同じで企業も誉められれば育っていくし、大人だってより良い活動をしていくものではないかと思えます。こういった活動をより発展的にしていくためには、良いことをしたら誉め合ったり、認め合うような文化というところが出てくると良いと思います。

関根)

東京電力(株)のような有力なパートナーが居る。更に魚沼市・群馬県・新潟県・福島県という強力なパートナーがいっぱい居るといのが尾瀬の特徴です。強力な人達が集まっている時にもしもお互いの調整が上手くいかなかったら、結果はかなり大変なことになってしまうだろう。ところが尾瀬は相当上手く調整が取れているような気がする。海外からのお客さんに何度も質問を受けました。誰が調整しているのか？誰がトップなのか？いろんな人達が集まる中心の場である尾瀬保護財団は、こういう強力な人達の意見調整をどういうふうにとって来ているのか？どういう苦勞をしているのか？

尾瀬保護財団 笛田)

誰がトップなのかということについては、多分トップは居ないのだろうと思います。尾瀬保護財団は1995年に設立されましたが、その前から関係者による話し合いの場の機関はあったわけです。意見調整などをいろいろと行ってきた中で、92年に3県の知事が集まって財団を作った方が良いのではないかとということで、財団設立の方向に動いて来ました。国・地方公共団体・東京電力(株)等関係者が沢山居る中で、それぞれが行っている事業政策を協調しながら尾瀬の優れた自然を守っていこうということで財団を設立した訳です。言い換えれば関係者の話し合いの場を持つということ、尾瀬の保護活動を一元的に行っていこう・新しい管理の在り方を考えていこうという3つが大きな目的でした。話し合いをしながら何をやっていくか考えていこうということでした。

施設整備は基本的にはそれぞれの団体がやっているのが実態であります。情報提供・利用者に対する尾瀬のあり方に対するPRについて財団が一元的に情報発信をしているという部分では、ある程度成果はあげていると自負しています。

関根)

スコットランド・インドネシアの公園管理はすごく尾瀬に似ています。でもどちらの場合も

大きな枠組み・共通の目的・ゴールを作って、誰がどんなふうにそこで協力していこうかを話し合いで決めていきます。今の尾瀬の状況は、誰が何をやるかということもまず皆で話し合っていて決めていこうと、極めて日本的で或る意味難しい状況で管理をしておられます。

この2日間鳩待峠から尾瀬に入り、尾瀬ヶ原を抜けて温泉小屋に一泊し、典型的な休日の尾瀬を尾瀬沼まで進んで沿山峠を抜け、奥只見湖を船で下ってこの魚沼市の温泉に浸かり、まだ尾瀬の旅を続けております。この2日間の尾瀬でどんなところに感激されたか？どんなところに幻滅されたか？問題点を見つけられたか？

ニュージーランド)

尾瀬では非常に高い優先順位を環境よりも保全に置いていることです。この点は皆さんを誉めなくてはならないと思います。「エコツーリズム」をより重く保全に重きを置く。保全は経済的な価値を持っています。ですからDOCに関して言えば、尾瀬は正しいことをやっていると思います。ニュージーランドでも同じことが出来たらと思います。

更に気が付いたことは、尾瀬ではとても慎重なリクリエーション活動を認めています。自然の保全を慎重にモニタリングしていらっしゃいます。皆さん方の取組みに賛辞を送りたいと思います。

インドネシア)

これは提言です。尾瀬国立公園で3つの種類の「エコツーリズム」を作ったらどうでしょうか？

1つは特別な「エコツーリズム」。まず自然の保全に注目しなくてはなりません。更に楽しみも提供しなくてはなりません。適切な収容力ということを考えなくてはなりません。そして「エコツーリズム」が持続出来るようにです。

もう1つ尾瀬ではキャンプ場のような大衆向けの施設は無いようにお見受けしました。また大きなピクニックなども行われていなかったように思います。ピクニック・キャンピングのような大衆向けの娯楽を提供してはどうかと思います。

そしてもう1つ。「エコツーリズム」は経済にも関係してきます。地元にも経済的な影響を与えるものです。ですからコミュニティとの関係を持つことが重要だと思います。例えばワインを作っている地域コミュニティとの繋がり、ネットワークを作ることです。外国から来る観光客にとってもこういったものがあるのは魅力的だと思います。

自然の保護ということに焦点を当てながら、人々が楽しめるようにしていくことが重要で、そのようにして経済的な恩恵も受けることが出来るのではないかと思います。

関根)

この2日間は日本で尾瀬を知っておられる皆様にはどちらかと言うと普通の尾瀬の歩き方、尾瀬は観光地化し過ぎたと日本人がいかにも知れない歩き方をしていたわけです。それが自然保護を非常に高いレベルで考えている「エコツーリズム」だというご意見がありました。そうやって見ると、もっと手軽に楽しめる尾瀬があっても良いのではないかと？例えばあまり時間が無い時に車で行って、燧ヶ岳を眺めるような所でキャンプやピクニックが出来るような場所はなかなか無い。更に尾瀬の周囲ではこんな名産品がありますといったものを楽しむ旅行があっても良いのではないかと？そういったものをひっくるめて、もっと大きな尾瀬の楽しみ方をこれからは考えて行かれるべきではないかという非常に重要なご指摘です。

午前中のご指摘の、もっと英語での情報を出せよというのもその通りでございます。

スコットランド)

とても美しく静かでのんびりとした所でした。そして環境の質の高さに感激し、特にゴミを片付けることに関するプロジェクトについて感銘を受けました。非常に素晴らしい取組みをされています。私達もそれくらい素晴らしい取組みを持てたらと思います。

自然の保護に関して将来対処すべきことですが、鹿の数の管理です。例えば鹿狩りのトレーニングを受けている人が十分に居ないということがありました。鹿の数を管理するために特別にトレーニングを受けた人材を育成することも重要ではないかと思います。

そして利用者に対しても結盟をしていくことが必要ではないかと思えます。生態系に関する失命を行って、管理計画の一環として鹿の数を管理しなければならないということを説明することがより重要ではないかと思えます。

関根)

確かに尾瀬では地域の皆さんのこれまでの努力の結果、私達が気付いてやってきていることについて管理のレベルは相当に上がってきている。でも気付いていないもっと楽しむ方法。気付いているが今までの経緯があるので上手く動けない鹿の対策。こういったものについて積極的に取り組んでいかなければいけない。特に鹿対策については、地域の人々だけではなく尾瀬が日本全体の皆さんにとって注目的であるならば、日本の多くの人達に尾瀬では増えすぎた鹿の対策を始めますと呼びかけていかななくてははいけない。

アメリカ)

この2日間皆さんが会うと「こんにちは」「こんにちは」と声を掛けてくれるんですね。これは嬉しく思います。アメリカの国立公園に行くと、朝雨が降っていたら映画でも観ることにして公園なんかに行かないというふうにしてしまいますが、私達が尾瀬に行った時は凄い雨だったのですが多くの人々が来ていました。日本人の精神、雨が降っていても何でもハイキングをしなくてははいけないというところは凄くびっくりしました。

また、ボードウォーク。東京電力(株)でもそのようなところに力を入れて、かなりの投資がなされているということでした。そしてリサイクルも素晴らしいです。都市化した公園というイメージだったのですが、公園の中にも車が全く無いですね。それには本当にびっくりしました。環境への影響をかなり少なくすることが出来ます。負荷を減らすということです。レンジャーの方も歩かなくてははいけない。普通公園にはレンジャーステーションのような所があるもので、移動は大体車で動くということなのですけれど、尾瀬ではとにかく徒歩で行かなければならなかったのですがそれは凄かったです。小さい子供が監督者も居なかったのに「こんにちは」と挨拶していましたし、躰もしっかりなされていて素晴らしかったです。

山小屋でタオルとかナプキンが無いのは私は不安になってしまう。自分でハンカチを持って行かなければならないですね。手を洗ったら自分のハンカチで拭くということ。このように公園で環境保護の精神といったものがいろんな所にあった訳です。これをアメリカは改善しなければならぬところだと思います。

休憩所のような所ですが、サインが無いですね。例えばベンチに座っている時に、この紫の花は何だろう?と思う。もしかしたら日本の観光客は知っているのかも知れませんが、海外の方は分からない。だからサインがあったらすごく良かったと思います。科学的な調査をして、ここにサインをしたら良いのではないかというふうな研究をした方が良いかも知れません。人々の危険にならないよう注意深くサインを設置していかなければなりません。

ビジターセンターですが、アメリカでは全てのシステムに対してフィルムを撮っていることもあります。海外の人などが2日間で尾瀬を堪能できるということは無いわけですよ。例えば10分から15分くらいのフィルムを使ってどういった公園なのか、どういったパートナーの方が協業しているのかを映画の形で見せるのも良いかも知れません。

ゴミ処理ですが、ヘリコプターでしているのはお金がかかりますね。長期的に考えると運営のコストがかなりかかってしまうのではないかと心配になってしまいます。

解説ということですが、人々の歴史というものを語るということが私はワクワクするわけです。明治維新の時戊辰戦争のサムライがここで起こったのですというような話など、「ラスト・サムライ」といった映画も観ていますので、日本の歴史が分かって公園をもっと身近に感じる事が出来る。その歴史を語って伝えていくことは重要なことです。

関根)

ボードウォーク・木道がしっかり引いてあって、高いレベルで維持管理されていることはどの参加者の方からもお褒めいただきました。我々日本人特に尾瀬の周辺のみなさんは、やらなければいけないと思ったことは非常に真面目にやられる。でもお客さんにも真面目さを求める。ただ楽しみたいというつもりで来る人達も居る。その楽しみたい人達を楽しませてやろう、お

もてなしの心、そういうつもりでの尾瀬の管理・国立公園の管理は確かにあまり考えていなかった。もっと多くの日本人達世界の人達にも来ていただくというのであれば、いろんなことを考えなければいけない。例えば尾瀬の入り口。新潟魚沼口・福島檜枝岐口・群馬県側3つ大きな入り口があるが何処にもビジターセンターが無い。それぞれの所にビジターセンターがあって、時間が少ししか無い人でも楽しめるような情報が何故無いのか？いろんな楽しませ方があるのではないかと思います。

高い評価を尾瀬に付けていただきましたが、各国で国立公園の管理に携わり研究をしておられる方々ですが、実は尾瀬のことを知らず尾瀬が初めてだった。来るまで殆ど分かっておられなかった。何故かと言うと尾瀬の情報を私達が出していないからです。尾瀬がこれから本当に日本の尾瀬だけではなく世界の尾瀬、国際的に評価される、多くの世界の方々が機会があれば行ってみたいと思う尾瀬になるためには、どんなことをしなければいけないのか？尾瀬のインターナショナルマーケティングについてお伺いしたい。

ニュージーランド)

尾瀬が究極的に求めていること、観光を世界的に推奨していくということになれば、非常に重要なことは皆さんがまずマーケットをする前に準備をしていただきたい。世界からの観光客に対して準備をするということです。例えば複数言語に対応しているようなサインを設けることがひとつです。課題は責任のある製品マーケティングということです。これから来園する方々に対していろんな情報を発信していくことが出来るわけです。

マーケティング活動を行う時に、どのような施設があるのか？どのような適切な活動を公園内で出来るのか？どういった振る舞いが公園の来園者に求められているのか？というようなことを、特に自然、非常にデリケートな部分に来るわけですから、何が求められているのか予めマーケティングで情報を流していきます。そうすることによって来園者の方々が何をすればいいのか、どういった活動を尾瀬でやったら良いのかを自分で判断することが出来ます。皆さんはこれから来る来園者に対して情報を提供するだけでなく、自分達自体も海外からのお客様何をしたら良いか分からない人達に情報を発信するということでも良いわけです、

関根)

ニュージーランドはこの点非常に進んでいます。ミルフォードサウンドという有名な美しい公園の中を歩く道がありますが、どう行けば良いのか、何も考えなくてもインターネットで検索すると、どこの業者にいくら払えばいつ行けるよ。その時にはこんな準備をして行きなさい。何はしてはいけません。どんな楽しみを期待しても良いですよ。お金はいくらです。全部出てきます。そういった意味で、尾瀬ではどんなことが出来ます。尾瀬に来るためにはどういうことをすれば良いと言う「情報」のひとつの例かも知れません。

インドネシア)

尾瀬は非常に美しいというのが私の印象です。国際的にも国際的なビジターにもマーケティングすることが出来ると思います。ここで大きな提案があります。是非ブランドイメージを考えてください。人々を惹きつけるに当たって重要です。

まず21世紀の最初の国立公園と言ってブランディングすること。これは非常に良いかも知れません。何らかの国際的なブランドイメージでビジターが魅力を感じるようにしてください。

ふたつめですが、他の箱根・富士・阿蘇などの国立公園との関係も考えなくてはなりません。国立公園の中でのネットワークを作れば良いと思います。それによって国際的な繋がりもこれを基に探って行けば良いと思います。

私も外国からのビジターなので、最初の情報はいつもインターネットで探します。ですからインターネットでの情報の発言（英語で出すこと）を考えてください。更に私達が尾瀬の美しさを簡単に理解出来るような情報をインターネットに載せてください。

関根)

インターネットでの英語化情報、これも日本人は難しく考えてパーフェクトな English で書かなくてはいけないと思わないで、分かれば良いという割り切りでとにかく情報を出していく。

表現がおかしいとご指摘を受けたら直していく。そういうことが必要なのかも知れません。地元の高校生・大学生とやっていったらどうなのだろうか？新潟魚沼の高校生に手伝ってもらってという方がずっと良いのかも知れません。

ネットワーキングについて。日光と尾瀬ということでネットワークはすぐにでも出来るということも考えても良いのかも知れません。

スコットランド)

ここに招待を受ける前は尾瀬国立公園を聞いたことがありませんでした。ですからインターネットで検索し情報を探しましたが、あまり情報がありませんでした。いくつかのサイトに日本の国立公園全体についての情報はありました。あるサイトではまだ日光国立公園の一部であるような情報もあり、尾瀬自体については殆ど情報が無かったのです。国立公園の歴史とか、ここで何を見れるか・何が出来るか、また宿泊についての情報、その他の見るべき場所などの情報を得られると考えていました。外国のビジターとしてホームページで何らかの情報を得ることを期待しています。今回は「情報が無かった」これが非常に重要な点です。また、尾瀬保護財団や環境省も、他の独立した業者と一緒にウェブサイトへの情報を出すことを考えても良いかと思えます。

入手出来る情報としては、国立公園内でどのように振る舞うべきかといった指針を出すことが非常に重要だと思います。ただ、行動のガイドラインみたいなものを出しても、それを見たから人が来なくなるような気持ちにさせてはいけないと思います。行動指針を出す前にまず外国からのビジターを惹きつけることが一番重要です。

関根)

我々日本人はみんな宣伝が下手だということですが、それで済ます訳にはいかない、もっと積極的に情報を出していくことを考えなければいけないということです。

アメリカの国立公園では黙っていてもお客さんが来るほどブランドになっている筈ですが、アメリカの公園についての日本語の紹介もインターネットにはいっぱいある。非常にマーケティングに熱心ですね。尾瀬・日本の国立公園はマーケティングをどんなふうに進めていくべきか？その際の注意点がありましたらご指摘いただきたい。

アメリカ)

公式の素晴らしいインターネットの情報を出すのは非常に難しいのです。ただ非公式な形で何らかのことが出来ます。まず Google (グーグル) や Wikipedia (ウィキペディア) を見ます。誰でも見る事が出来ますし、誰でも情報を付け加えることが出来る。非常に多くの情報があります。尾瀬保護財団やパークレンジャーの方がまずやっていただければ一番簡単だと思います。Wikipedia に自分で情報を追加していったらどうでしょう？私だってフリータイムで自分でそういうことが出来ると思います。

ビジターセンターについて。人々は直接ビジターセンターに来ます。それぞれの県の入り口にビジターセンターが必要かどうかという話がありましたが、この点は注意してください。私達のビジターセンターは 7 万 9 千の建物があって多くの資金がかかってしまう状況になりました。建物を作り過ぎてしまったのです。ビジターセンターを作る時は作り過ぎないようにしてください。

もうひとつ国際的にマーケティングする活動としましては、ナショナルジオグラフィック* (※文末脚注：Wikipedia より) と一緒に協働し、記事を書いてもらえば良いと思います。私は彼らと連絡を取って協力しています。とくにジオグラフィックのトラベラーマガジンです。彼らはジオツーリズムというプログラムがあり、持続可能な観光といったものを推し進めているものです。ジオツーリズムのマップというものを持っていて、この中に面白い文化的施設・自然の施設を入れています。尾瀬の中でそういったものが何処にあるのか私に聞いてきました。この団体に連絡すれば興味を持って採り上げてくれると思います。

それから姉妹公園を作ったらいかかでしょうか？沢山の恩恵があると思います。両方の公園それぞれのウェブサイトがありましてそれを繋げます。片方を見たらそこから姉妹公園で尾瀬があるとそれも見る事になります。片方の公園に行ったら来年は尾瀬に行こうということに

なるわけです。姉妹公園環境を作れば多くの人が尾瀬について知るようになります。

また、英語を話す公園と友好関係をとって、自分達が翻訳した英語をきちんと文法的に正しい英語に直してもらえば良いと思います。

このような活動をすることによって、外国からのビジターを増やすことが出来ると思います。

関根)

日本は姉妹都市を結んでいる町や村が沢山あります。姉妹公園は全然おかしくはない。

ビジターセンターに行くためには3時間4時間歩かなくてはいけない公園は、世界にあまり例が無いこともまた事実です。いろんなことを考えて何をやっていくべきかということ、これから是非検討していかなければいけないということになるでしょう。

環境省としては、尾瀬を初めとして日本の自然公園・国立公園をもっと世界に向けて発信をしていくことの重要性・そのためにどんなことをしていこう・どんなことを関係地域に呼び掛けていこうとお考えでしょうか？

環境省 笹田)

確かに情報発信が出来ていないことは痛切に感じています。ひとつはサインとか設備を英語で表記して外国の方が分かる、もうひとつは山小屋でも外国の方が一人で来ても安心して泊まって日本語が分からなくても尾瀬を楽しんでいける、そういった設備やサービスの面をバックアップしていく必要はある。ウェブサイトなどによる情報発信も、環境省が作っても環境省のひとりよがり的なことになってしまうと思うので、尾瀬保護財団や東京電力(株)といったいろんなホルダーがいるので、連携し合いながら情報発信をしていくことが大事だと考えます。

関根)

財団の方がもう少し柔らかく自由に動けるかも知れない。財団の方から非公式かも知れないが非常に充実した使い易い英語の情報を出していく。そして財団にお集まりの尾瀬の皆さん方に、こうやって海外に情報を発信し海外からのお客さんをおもてなししてくださいというような動きを作っていくことについては？

環境省 笹田)

尾瀬は日本の中ではあまりにも有名だったので何もしなくても人が来てくれた。尾瀬に関するサインも何も無くても別に済んだ。そういった現実があるというのがひとつです。今は国際観光で外国からお客様を呼ぼうということで、これから態勢を作っていくという状況にあります。今までははっきり言って何もしていなかった。

尾瀬は国立公園・自然公園とは言っても特殊性があると思います。お客さんがいくら来ても良いというふうには必ずしもなってはいないと私は思っています。自然公園法とは別に文化財保護法の縛りがかかってくる。特別天然記念物という制約もかかってくる。そういう意味では尾瀬に対するいろんな思いを持っている方が沢山いらっしゃって、なるべく人が来ない芳が良いんだと思ってる方だっていらっしゃる。そういう方たちの意見も併せて尾瀬の保護と利用をどんなふうに調整をつけていくか、それも含めて外国からのお客さんと呼ぶことも考えなくてはならないと思っています。

関根)

尾瀬に沢山の人が押しかけると、オーバーキャパシティになってオーバーユースという環境問題が起きてしまうかも知れない。それは常に尾瀬で議論されている問題ではあります。施設を改善することでオーバーユースを無くすることも出来るかも知れませんが、そんなに施設を作ることがまた尾瀬の自然を壊してしまうかも知れない。しかし、施設を無理に作らなくても尾瀬に来られる方ひとりひとりが環境のことについて自発的に考えてくれるならば、今より沢山の人が尾瀬に来て環境影響はひどくならなくて、そして尾瀬をもっと多くの方が楽しんでいただけるのかも知れません。要するに環境教育の重要性だと思います。尾瀬での環境教育は今どういう現状なのか？十分だと思っているのか？どんなことが足りないと思っているのか？どんなふうにしていけば良いのか？

東京電力(株) 竹内)

尾瀬での環境教育は会社の姿勢としまして環境とエネルギーはどうしても不可分。子供の時から考えるようなバランス感覚を身に付けていただきたい。だからいろんな事実をお伝えして考える教育に貢献していきたいというのが会社のテーマとなっております。尾瀬においても環境教育が出来ればと前から取り組んでおりました。例えば尾瀬に林間学校で出かけて行くお子さん達の学校に事前に出かけて、出前授業という形で尾瀬の成り立ちや保護活動や魅力をお伝えすると、やはり人が汗をかいて守っていることを知るとお子さんたちの態度は全く違々と尾瀬の現地のガイドの方からお伺いします。

日本人が伝えることがまだまだ不足しているという話が出ていますが、綺麗な所だけ来る方に見せて、綺麗な自然を守るためにお金がかかっていたり汗をかいていたりという部分を見せないことが美徳となっておりますが、そういうものを見ることによって知ってもらうことが、「みんなの尾瀬をみんなで守ろう」ということが「みんなの地球をみんなで守ろう」ということに繋がっていくと思います。群馬県では尾瀬学校とって就学期間に必ず一度は尾瀬に行くという取組みを始められて、これは尾瀬における環境学習だけでなく郷土の誇りという点でも素晴らしい取組みだと思えます。これはどんどん広がっている部分だと思えます。

関根)

スコットランドの国立公園では子供たちへの国立公園学習・環境学習をどんなふうにお考えで、どんなふうにやっておられるのか？群馬県の尾瀬学校のような活動をどう思われるか？

スコットランド)

子供達が尾瀬に行くイニシアチブは正しい方向だと思います。スコットランドでもこのようなことを行っています。スコットランドでは国立公園はまだ新しく、様々な教育に関しては作っているところです。主なことは政府のレベルですが、学校が子供たちに対して行う教育に関するガイドラインを制定するというものです。こういったトピックをカバーしなければいけないのかといったことが定められており、ガイドラインが全ての学校に対して提示されています。子供達が国立公園に関しての知識を得ることが出来ます。地元の学校との協力も行っています。一部地域では自治体と協定を結んでいて、学習の一環として国立公園を訪問するプログラムを設けています。教育という意味では非常に重要なことだと思います。尾瀬とその地域の教育ということだけではなく、より大局的な教育、例えば地球の温暖化などに関する教育にもなると思えます。

関根)

インドネシアは公園の周囲の人達だけではなくいろんなところから来る公園利用者に対する環境教育という面で、今どんなことをしておられて、今後はどんなふう活動を発展させていきたいとお考えでしょうか？

インドネシア)

現在では教育を行うために学校だけでなくあるプログラムを持っています。非常に有用なものでありまして、自然保護に関する意識を向上させるために重要なものだと思います。環境は既に荒廃を始めています。私達は2つのことを提供しています。ひとつは企業に対して、もうひとつは人々に対してです。

一定の資金を提供することによって、例えば1年に100円。これによって国立公園の歴史について学ぶことが出来ます。荒廃を始めている国立公園の現状についても知ることが出来ます。不法な伐採が原因です。また開発の記録も取っています。地球への温暖化の影響についても注意をはらっています。このような方法論をとることによって人々の国立公園に対する意識を高めることが出来ると思えます。

2番目のプログラムとして、どのように尾瀬の情報といったものを学校教育のカリキュラムに生かしていくことが出来るのかということです。中学校そして小学校でも考えていかなければならないと思えます。学生が選択して課外授業を受けるということも考えられますし、夏期

講習・林間学校を行う時に生徒を招待して、実際に子供達に自分で木を植えてもらって、その木を自分のものとしていくというようなことも考えられます。NGOとも協働しています。インドネシアの国立公園の協働を地域で行っていくということです。このような方法論とかやり方を使うことによって、環境に関する教育をすることも自覚を促すことも出来ると思います。

関根)

子供達が木を植えるのは尾瀬林業(株)が中心になって尾瀬でも盛んにやっている活動です。しかし、公園計画の中にきちんと公園としての活動として位置付けられているかということ、どうもそうっていない。もっと楽しんで良いのではないかといただいた一方、インドネシアでは学ぶということでも公園全体でしっかりとしたプログラムを作っておられる。公園としての取組みがこれから尾瀬にも重要となってくるのかも知れません。

尾瀬の場合はたまたま皆さんの認識と善意が合致したから上手くいっている。上手くいっているレベルはかなり高いレベルかも知れない。でもどうして尾瀬はここまで上手くいっているのか？だから今度はどんなふうにしていくのかということ、皆でしっかり考えていかないとこれからの尾瀬の発展も難しいでしょうし、海外にもなかなか紹介が出来ない。こんなことをやっているという「こんなこと」がうまく説明出来ない。そういう状況のままになってしまうのかも知れません。よその目から見ていただくことは、誉めていただくまた叱っていただくという面、また我々自身が今自分でやっていることはどんなことなのか？どこに問題があるか？ということに気付かされるという面でも非常に意味があったと思います。どうもありがとうございました。



*ナショナル ジオグラフィック協会 (National Geographic Society) は、地理学の普及を目指した 33 人のメンバーによって 1888 年 1 月 27 日に設立された団体。月刊誌『ナショナル ジオグラフィック』の発行元として有名。現在、本部はワシントン D.C.

ナショナル ジオグラフィック

第一刊は、協会設立 9 ヶ月後、1888 年 10 月に出版。最初の雑誌名は **The National Geographic Magazine** で後に、**National Geographic** と短くなった。1896 年 1 月から月刊誌となり、その時に黄色の縁取りされた装丁となった。ナショナル ジオグラフィックは世界で良く知られている雑誌の一つに数えられる。またアメリカ雑誌初の全編カラーとなった雑誌でもある。

日本語版は 1995 年に、外国語版としては世界で初めて創刊。日本語版の出版元は日経ナショナル ジオグラフィック社(日経 BP 社とナショナル ジオグラフィック協会の折半出資会社)である。2005 年現在は日本語版の他に、イタリア語、ギリシャ語、スペイン語、ヘブライ語、ギリシア語、フランス語、ドイツ語、ポーランド語、タイ語、インドネシア語、韓国語、ポルトガル語、中国語、チェコ語、ルーマニア語、ロシア語、ノルウェー語、トルコ語、オランダ語版などが出版されている。世界で 900 万部以上販売されている。